

第三十七期スクーリング講義録（ダイジェスト版）

日本仏教史

―大乗仏教より密教へ―

大正大学名誉教授・元学長 小峰彌彦 先生



はじめに

仏教は長い歴史を通して様々な変化をしながら展開してきたが、そのなかでも大きな変革をもたらしたのは大乗仏教の出現であり、さらにはその後に興じた密教を登場である。仏教の流れは南伝と北伝との二つがあるが、日本仏教は北伝仏教の系統線上にある。このうち日本に大きな影響を与えたのは北伝仏教であり、具体的には大乗仏教と密教が主流である。

密教は後期大乗の範疇と捉え大乗仏教の延長線上とする考えもあるが、私は大乗仏教と密教とは区別して捉えたほうが双方の独自性がより明確になると思っている。また大乗仏教を代表する般若経は自らを第二の転法輪と標榜し、変革を自覚している。このことを踏まえて考えると、密教は第三の転法輪と解釈することができる。実際に大乗と密教とは、互いの教理や実践に大きな相違点があること事実である。それ故、密教を大乗仏教の延長と見るより、むしろ密教を新たな変革と捉えたほうが、双方の特徴をより明確に理解することができる。

大乗と密教

大乗仏教と密教との大きな相違点は、両者の目標が異なるところにある。もちろん慈悲や縁起の理念は両者とも基盤とするところであるが、仏教を捉える視点を見ても大きな違いが見受けられる。視点の置きどころが違っていれば、教理や実践に大きな差異が生じるのは当然のことである。言うまでもないが新たな仏教運動を推進するためには、必ず釈尊の一生を深く見つめなおし、仏道にはずれないように心がけている。そのなかで何よりも重要視していることは「釈尊が体現した悟りの事実」と、「その悟りを自身に留めおくのではなく社会に向けて発信したこと」の二つである。

この二つを大乗仏教と密教に照らしてみるとその違いが分かる。すなわち密教は釈尊が体得した「悟りを得るための実践」を重視したのに対し、大乗仏教は釈尊が菩提道場から立ち上がり「仏教の教えを社会に広める」その教化行動を選択したのである。だからといって大乗仏教は自己研鑽の道を捨てたのではなく、また密教も社会教化の姿勢を持たなかったわけではない。

換言すれば、大乗仏教は釈尊が四十五年間に亘って倦むこと無く実践した利他行の意義を重く受け止め、衆生救済活動こそが自分たちがなすべき第一目標と位置づけたのである。つまり大乗仏教は自らの成仏を目指すための実践修行に重きを置くのではなく、現実社会における衆生救済のための利他的実践を軸に据えたのである。具体的に言えば、出家者と在家者が一丸となって歩む「菩薩行」を大乗仏教の基盤としたのである。そしてこの大乗菩薩行は地域宗教に止まらず、世界に広げる原動力となったのである。

悟りの表現と曼荼羅

以上のように、大乗仏教は私たちの生活に焦点を当てた活動である菩薩道を中心に実践してきたのだが、密教は社会活動ではなく菩提道場における聖なる悟りの世界を目指すことに着目したのである。密教が出家修行者の実践を根幹としていることは、密教教学を打ち立てた空海が明確に述べている。すなわち空海は、仏教の最終目的は「この身このままで悟りを得ることにある」とし、即身成仏思想を打ち立てたことに象徴されている。即身成仏を掲げた密教に対し、大乗仏教は「悟りの境地は奥深く人間の思議を超えた世界である」と述べ、ここは俗世間を超えた聖なる世界であり如来以外は誰も触れることができない領域としたのである。それ故、悟りの境界は私たちが日常に用いている俗世間の言葉では語り得ないとし、「言語道断」といい大乗仏教の活動とは別な次元のものとしたのである。またこの世界は人間の心の働きを遙かに超え異次元にあるとして、「心行処滅」との言葉で述べている通りである。すなわ

ち大乘仏教は悟りを目指す修行を優先するのではなく、俗世間における衆生救済の実践活動を第一としたのである。

しかし密教では悟りの世界は日常の言語では語りえないとしても、別の方法を用いることができる。求める人々に伝えることは可能としたのである。それを介在する方法が曼荼羅なのである。

知つての通り曼荼羅は經典のように文字で教理を示すのではなく、私たちの日常言語は一切用いずに「いろとかたち」のみで悟りと智慧の働きのありようを総合的に表現したものである。經典に説かれた文字の教えは悟りそのものを語るものではなく、あくまで説明の範疇にあり、それを超えることは叶わないのである。ではなぜ曼荼羅が聖なる世界を現したものでなか、またそれが密教とどのように結びつくのか、という問題は次の課題としておきたい。

密教を求めていた空海は、悟りの世界を図絵で描いた曼荼羅を入手する目的のため入唐したのである。遣唐使船では途中に大風に遭遇するなどの苦勞があつたが、何とか長安の青竜寺に辿りつくことができた。そして恵果阿闍梨の弟子となることができた。念願としていた灌頂を授かることができたのである。灌頂とは密教を伝承するために、成さねばならない重要な密教儀礼である。その灌頂を授かったことで曼荼羅を獲得する資格が得られ、その結果に曼荼羅を日本に持ち帰ることができたのである。ちなみに空海が請来した曼荼羅は、『御請来目録』の記述によれば、大悲胎藏大曼荼羅・大悲胎藏法曼荼羅・大悲胎藏三昧耶略曼荼羅・金剛界九会曼荼羅・金剛界八十一尊曼荼羅などである。

これらの曼荼羅を空海に授与した恵果阿闍梨は、『真言秘蔵は隱密にして、図画（曼荼羅）をからざ

れば相伝することあたわず」と述べ、密教の神髄を描いた曼荼羅は密教の教えを相伝するためにはなくてはならないものと明らかに述べている。曼荼羅には私たちが日常に用いている文字は一切記されておらず、そこには数多くの仏・菩薩・明王などの形像が描かれているのみである。もとより曼荼羅図は単なる絵画ではあり得ない。つまり曼荼羅に描かれた尊像などはすべて大日如来の悟りの働きを表現したものであり、言うならばまさに悟りの智慧の表現そのものである。すなわち曼荼羅に描かれた図絵は悟りの世界を現したものである。まさに悟りを求める人々との融合を計つたものである。それ故、曼荼羅に描かれた形像の意義を正しく観察することができれば、曼荼羅の世界と結びつくことができ、私たちも悟りの世界に入ることが可能となるのである。



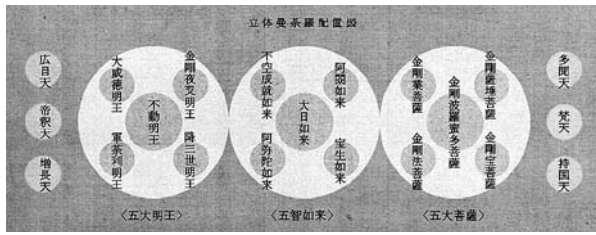
講演会の様子

四種曼荼羅

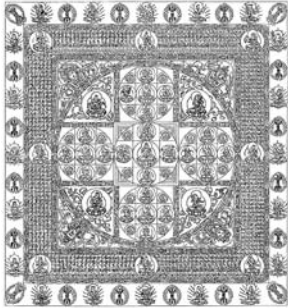
このように悟りの内実を描いた曼荼羅は、言葉で説明し知的に理解するためのものではなく、描かれた図像と一体化し自らが体現するものである。前述したように悟りの境界は知的に解釈するものではなく、真言行者が修行の結果に体現できるものである。そのため密教は悟りを体現する修行として三密行の重要性を説いたのである。もちろんこの三密行の原点は、釈尊が菩提樹下で瞑想してえた実践体験を想定したものであり、その宗教体験に重ね合わせているのである。なお悟りに至るまでの実践は三業といい、三密は修行者の身（行為）・口（言葉）・意（心）の働きが仏と一体化した世界でのことである。すなわち三密とは、悟りに到達したときの行者の姿そのものである。この三密行は密教独自の修行であり、具体的には悟りを目指す真言行者が「手に印を結び、口で真言を誦誦し、心を静寂に保つ」修行なのである。そしてこの身・口・意の働きは障害を断ち仏と一体となつたときの境地であり、そしてその有り様を「いろとかたち」で表現したものが曼荼羅なのである。

つまり曼荼羅図は、この身・口・意に亘る三密行の修行体験の内容を図絵として描いたものであるが、実際にはその内実をどのように表現したのであるか。空海はこの悟りの世界を表現するのには、四種曼荼羅という方法があると論述している。すなわち自著『即身成仏義』のなかで『大日経』の記述を引用しつつ、曼荼羅図による表現には四種の形態があることを次のように述べている。

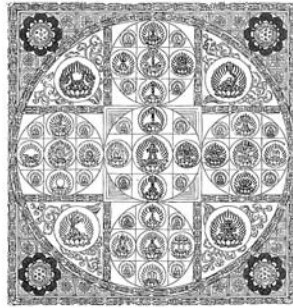
四種曼荼羅



羯磨曼荼羅



大曼荼羅



三昧耶曼荼羅



法曼荼羅

① 大曼荼羅

大曼荼羅は、一々の仏・菩薩の相好を人格身で描いたものである。その姿はいろどりをした布などに、仏・菩薩の姿を描くことで示されている。

以上のように『大日経』には、秘密身を描くためには字・印・形象の三つの姿で表現できると述べている。そこで四種曼荼羅として描かれた曼荼羅では、悟りの姿をどのように表現しているのかをはじめに見ておきたい。

「一切如来に秘密身（悟りの姿）あり。いわく字・印・形象なり」（『大日経』）。「字」とは法曼荼羅なり。印とは種々の標幟すなわち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身すなわち大曼荼羅なり。この三種の身に各々威儀事業を具すを羯磨曼荼羅と名づく。これ四種曼荼羅なり」。

これらの尊像は大日如来の悟りとその智慧の働きを、尊像に込めて描いたものである。大曼荼羅は「五相を修行して本尊と一体化をなしたときの智慧の働き」を現したものである。五相とは五相成身觀の略称であり、密教独自の修行方法であるこの觀法は『金剛頂經』によれば、「苦行をして一切義成就菩薩が、大日如来から示唆を受けて如来となった」その修行のことである。五相とは瞑想法の一つであり、具体的には「通達菩提心・修菩提心・成金剛心・証金剛心・仏身圓滿」である。すなわちこの五相は悟りを目指し、心を集中し高めていく五段階の心の進展を示したものである。繰り返すが、この「五相成身觀」は金剛頂經に説示されている瞑想法であり、まさに心を一点に集中し自心と悟りとの融合を目指す修行である。悟りに向けた心の有り様を五段階に分けているので、五相と名づけられたのである。この内容を具体的に描いた曼荼羅としては、金剛界九会曼荼羅の中央に位置する「成身会（じょうじんね）」がその代表である。

② 三昧耶曼荼羅

三昧耶曼荼羅は意密の曼荼羅と呼ばれている。三昧耶はサンスクリット語のサマヤの音写語であるため、漢字を見ただけでは語義が分かりにくい言葉である。密教ではこの三昧耶を、人々を思いやり救済せんとする仏心の働きと解釈し、「本誓」の言葉を当てている。本誓とは仏・菩薩が人々を仏道に導かんと願う心を示したものである。その本誓を伝える手段として表現したものが、仏・菩薩などが所持している様々な標幟である。標幟とは刀剣・輪宝・金剛杵・蓮華などのいわゆる法具であり、これに加えて修行者が両手を和合して印を結ぶ印契も含まれている。これら仏・菩薩が所持するものや印契を用いて描いたものを三昧耶曼荼羅という。三昧耶曼荼羅については、金剛界九会曼荼羅の下部の中央に置かれた「三昧耶会」がそれである。

③ 法曼荼羅

法曼荼羅は種子・真言で描いていることから、言葉の曼荼羅あるいは口密の曼荼羅とも称されている。実際の法曼荼羅は梵字を用いて描かれているので、これを種子曼荼羅ともいう。曼荼羅は大日如来を根幹に据えその智慧の働きを仏・菩薩で描いたものであるが、種子曼荼羅は尊形ではなく梵字のみで描かれたものである。種子という名称は、花木などが一粒の種から生み出されたように、そこには生命を成長させるすべての要素が凝縮されている。それで種子の名がつけられたのであるが、法は言葉による曼荼羅であることから、あえて種子という文字も用いられている。梵字が選ばれたのは、この字が經典に用いられたように聖語だからである。

④ 羯磨曼荼羅

羯磨とは梵語のカルマンの音写語で、行為・行動などの働きを意味した言葉である。羯磨曼荼羅は、まさに悟りが躍動している有り様を現したものである。

ある。しかし動きはすべての存在にあるので、特定の表現は困難といえる。但し羯磨曼荼羅と称されるものは存在しており、その代表例が東寺の二十一体からなる立体曼荼羅であり、これが羯磨曼荼羅と呼ばれているのである。羯磨曼荼羅は諸々の仏・菩薩の様々な威儀事業を現したものであり、素材としては鑄造・捏造で作られた立体的な尊像などと言うことができる。

しかしこの立体曼荼羅も尊像であることからして、大曼荼羅ということもできる。なぜなら羯磨は働きであるから、動きそのものは形ににくいものである。そして如何なる存在にも羯磨は内在されているので、大・三・法の三曼荼羅のすべてに羯磨は存在しているのである。

胎藏曼荼羅

以上述べてきたように、四種曼荼羅は密教が目的とする悟りの内容を四つの視点から表現したものであり、經典のように教理を説いたものではない。密教の捉えた教理内容を組織的に描いた曼荼羅としては、金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅の両部曼荼羅が代表的なものと存在している。特に大乘仏教と密教の関係を視野に入れ、これを組織的に描いたものの代表的な曼荼羅が胎藏曼荼羅である。当然のことであるが、胎藏曼荼羅は『大日經』の教説をもとに描いたものである。ここには般若經をはじめ大乘仏教の教理も含まれている。しかし密教經典と大乘經典は共通の部分があつても、もちろん大きな差異点はある。それに関しては『大日經』と『小品般若經』の両經の書き出しの部分から読み解くことができる。その部分をあげれば次の通りである。

『大日經』

一時薄伽梵、如來の加持せる広大法界宮に住せり。一切の持金剛者は皆悉く集会す。……中略……虚空無垢執金剛く金剛手秘密主。

『小品般若經』

佛は王舎城の耆闍崛山中に大比丘僧千二百五十人と在せり。俱に皆阿羅漢なり。諸漏已に尽きて調象王の如し。所作已に弁じて重擔を捨てて、己利を逮得して諸の有結を尽す。正智解脱し心自在を得る。唯阿難を除く。爾の時佛は須菩提に告ぐ。汝樂説者よ、諸菩薩のために応に成就すべき般若波羅蜜を説くべし。

大乘仏教と密教の立場の相違は、今提示した兩經の序の小文を読み取ることで見ることができ。もちろん大乘仏教と密教との特徴や相違点は、これ以外にも数多く指摘できるが、今はそのなかの一例として取り上げて見たものである。經典のはじめの部分は、その經の趣旨を読み取るのに重要なことは言うまでもない。そこで兩經の特徴を見ることがしたい。

まずはじめの問題点は説所の違いである。『大日經』の教えが説かれた場所は「広大法界宮」となっているが、この広大法界宮とは現実に存在する場ではなく架空の存在である。言い換えれば架空と言ったのは、ここが禪定体験の聖なる空間であることを暗に示しているからである。すなわち広大なる法界宮という言葉を用いたのは、『大日經』が説かれた場所が悟りの世界であることを言わんがためなのである。それに対し『小品般若經』の場合は、説所を「王舎城の耆闍崛山中」としている。この場合は、般若經の教説が瞑想体験のなかではなく、現実社会に向けられていることを示している。ここに両者の仏教を捉える方向性の

違いが現されているのである。

そして第二の相違は教説を聞く側、すなわち聴聞者の違いに見ることができる。『大日經』では、聴聞者を「虚空無垢執金剛く金剛手秘密主」とあるように、十九人も金剛という名を付した菩薩を対象としている。金剛なる菩薩とは、現実に存在する大乘仏教の菩薩ではなく、大日如來の智慧の働きを尊像化した瞑想上の存在である。密教ではこの金剛菩薩を聴聞者としているのである。大日如來の説法を金剛薩埵が聴くという設定は、悟りと智慧を人格化したものであり、まさに聖なる悟りの世界を現している。しかし『小品般若經』では「諸菩薩のために応に成就すべき般若波羅蜜を説くべし」とあるように、その教説は現実社会に存在している人々に向けてのものなのである。この相違点が大乘仏教と密教を区別する大きな特徴なのである。

おわりに

このたびの講義では、密教を中心に大乘仏教との相違点をあげ述べさせていただいた。特に四種曼荼羅を取り上げたのであるが、これは悟りの世界を伝えるための表現方法なのであつて密教教理の内容を描いたものではない。密教の教理内容を示した曼荼羅は、金剛界曼荼羅と胎藏曼荼羅に代表されるが、いまはそれに触れることはできない。

この両部曼荼羅を基盤とする密教は、日本においても天台宗や浄土宗などの大乘仏教や神信仰の大きな影響を与えたのである。このことが具体的にどのようなものであつたかは、別な機会に述べたいと思っている。

(終)